

朝日 俳壇



〈アオモジⅢ〉 日高理恵子

◆大申 章選

- 桜には見せぬ顔して梅見かな (川越市) 渡邊 隆
- 老木に芽吹く気概の見えて来し (さいたま市) 齋藤 紀子
- 鈍色の能登を残して鳥帰る (さいたま市) 新 曆文
- A I が句敵となる余寒かな (松阪市) 石井 治
- 秘湯へと舟で行くなり梅一枝 (浦安市) 中崎 千枝
- 人情を貰う老後のバレンタイン (相市) 加藤 安博
- 教習屋橋真知子巻して雪女 (えびの市) 川野 一広
- 淡雪の一句書き留む待合室 (伊丹市) 保理江順子
- 橋桁に突つ込んでくるつばくらめ (神奈川県松田町) 山本けんえい
- 初蝶や迷子が母を探すかに (青梅市) 市川 盧舟

【評】第1句。「桜には見せぬ顔」がおもしろい。花見と梅見は趣が異なる。第2句。老木に芽吹く「気概」を見て取る。古木を尊び慈しむ作者。第3句。能登半島地震による被害は甚大、復興には時間がかかる。渡り鳥は春が来るど北方へ帰る。

◆高山れおな選

- ☆雪女いづれ汝も雨女 (藤沢市) 朝広三猶子
- 太陽に近き枝より梅咲けり (筑西市) 加田 怜
- 鳥風や七曜知らずけふ立ちぬ (市川市) をがはまなぶ
- 面々の面見定むる野焼前 (長崎市) 下道 信雄
- ☆遅くなりますの書置き日永かな (羽曳野市) 菊川 善博
- 梁が泣くそらそら雪を降ろさねは (東京都世田谷区) 石川 昇
- 吾に似ぬ貌窓にあり夜の雪 (小平市) 本多 達郎
- 雛の間へ寝るといふ児の自立かな (川口市) 小松トシ子
- 牙返る運といふ字に軍のゐて (川越市) 渡邊 隆
- ホームセンター駐車場「満」風光る (我孫子市) 藤崎 幸恵

【評】朝広さん。存在の次元を異にする雪女と雨女。雪が雨に変わる実事。両者を巧みに重ね合わせた。加田さん。僅かな日当たりの加減の問題を「太陽に近き」と大らかに捉えた。をがはさん。北へ帰る鳥たちの無心の飛翔。詩情が深い句だ。

◆小林貴子選

- 強情な寝癖よバレンタインデー (飯能市) 細田 裡子
- 缶詰の波稜草を終に見ず (岩国市) 富田 裕明
- わざと踏み人まづつぬない落椿 (多摩市) 金井 緑
- 妹逝く空は近くて春西 (さいたま市) 森田 光子
- 立雛の舞をひとさし見せむとす (東京都中野区) 吉田 徹夫
- 春塵の積る地球儀北半球 (横浜市) 我妻 幸男
- 落胆の夢はこりこり布団干す (川西市) 糸賀 千代
- 豪快な母の命日涅槃の日 (戸田市) 蜂葉 厚子
- 九十四今年も違ふ春が来る (川崎市) 山本しげを
- ☆遅くなりますの書置き日永かな (羽曳野市) 菊川 善博

【評】一句目はチョコレート飛びかうバレンタインデー。その朝、まずはこの寝癖を何とかしないと。二句目のほうれん草は春の季語。あの缶詰さえあればポパイになれたのに。三句目、曇りがあるとは言わないが、椿を踏みのはなまなましい。

◆長谷川耀選

- 朝寝して人に数多の選択肢 (京田辺市) 加藤 草児
- 風花や海を棄てるどよ漁師 (高松市) 島田 章平
- むくむくと何かか動く春の土 (柏市) 藤嶋 務
- 杏子忌や女流集成わが標 (熊谷市) 松葉 哲也
- アベ政治の始末も出来ず兜太の忌 (高松市) 小林 紀彦
- 朝寝して晩年の知恵深くあれ (筑西市) 加田 怜
- うつくしきあきとを上げて春動く (八王子市) 額田 浩文
- 人生の春一番だ初孫は (筑紫野市) 二宮 正博
- ☆遅くなりますの書置き日永かな (羽曳野市) 菊川 善博
- ☆雪女いづれ汝も雨女 (藤沢市) 朝広三猶子

【評】一席。どんな苦難のときも選択肢が三つは残っている。絶望するなかれ。二席。代々のなりわいを捨てる。根を切られるに等し。三席。原句は「騒ぐ」。動くのほうがりアル。言葉の味の違い。十句目。温暖化の果て。水蒸気女も。

うたをよむ 人生を刻んだ投稿歌

朝日歌壇に半世紀近く投稿を続けた大阪府和泉市の長尾幹也さんが1月末、闘病の末に亡くなった。66歳だった。初掲載は高校3年生の時。経済的な理由で大学の夜間部に進み、中堅の広告会社に入社。「向いていない」と悩みつづき、営業の仕事をした。自ら人選して告げた解雇。降格。単身赴任。「苦しい時は歌は生まれた」と話していた。リストラに幾人かを切り捨てし、その影像の「と我はひび割る」

62歳の時、多系統萎縮症と診断され、近年は闘病がテーマに。会話が難しくなつた昨年11月以降も、ベッドの傍らで妻朱美さんが「短歌する？」と聞くとなぜ、視線入力機器を使って詠んだ。「気持ちをつづけるのではなく、作品として完成させたい」という思いが最期まで強かった」と朱美さんは振り返る。妻は泣きわかれは視線に文字を打つ午後最後の投稿歌を1月7日付の紙面で1

首目に選んだ選者の永田和宏さんは「難病にかかりながらも詠み続けた歌は、読む人に、生きていくとはどういうことか問いかけるものになつていた」と語る。歌集を2冊出し、短歌講座で教えた長尾さんが投稿を続けたのはなぜか。2年前の取材で尋ねると「新聞歌壇には大衆の息吹や活気を感じます。いろんな人生が見られるし、歌を詠まない人も読んでくれるところがいい」と返ってきた。ファイルに取められた掲載歌は830首。歌を通して長尾さんの人生に触れた読者からいま、追悼の歌が次々に寄せられている。(歌壇担当 佐々波幸子)

藤英樹著「俳句500年 名句をよむ」著者は「きこさい」編集長。室町時代の心歌から現代の稲畑汀子まで、古今の名句を深く読み解く。(コールサク社・2200円)
岸本尚毅著「俳句講座 季語と定型を極める」短い季語と長い季語の扱い、定型にどう収めるか、切れ字の使い方、韻律をどう作るかななどを例句で解説。(草思社・1980円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信